

のり養殖の季節を迎えて 一のり漁場の環境動向一

企画情報部 企画普及グループ

のり養殖には健全な種網の確保が重要で、育苗期は、のり網を張り込んでから17日以内に水温20℃を下回らないと基部の発達不良により、のり芽が脱落してしまいます。

図1は水試が構築した漁海況情報発信システム（Ai-FISH）にアップされている3号ブイの9月の水温推移を示しています。今年は9月に入っても暑さが厳しかったものの、海水温は昨年より低めに推移しており、現在では概ね例年並みとなっています。豊浜地先のデータもAi-FISHから入手できますが、同様の傾向を示しています。

しかし、東海地方の3ヶ月予報（9月22日気象庁発表）では、気温の高い確率が10月は60%、11月は40%となっており、種網管理には注意が必要です。

種網生産には、育苗期の順調な水温降下と適切な干出が重要なことから、張り込みのタイミングや張り込み後の網管理には細心の注意を払い、健全な種網を確保して、今漁期の生産に臨んでください。

なお、漁海況情報発信システム（Ai-FISH）では各ブイの水温・塩分など、のり養殖に必要なデータがリアルタイムで確認できるので、のり網の管理等に活用してください（図2）。また、LINE登録をいただくと、各地区の栄養塩調査結果や海苔共販結果等の最新情報を受け取ることができます。詳細については、欄外のQRコードより御確認ください。

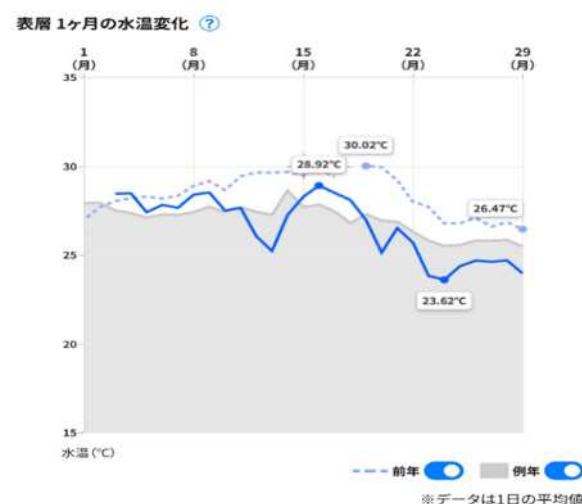


図1 水試3号ブイの水温推移

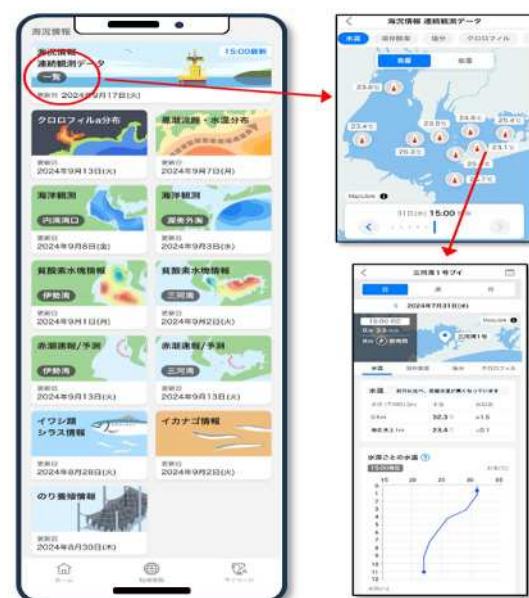


図2 Ai-Fish（スマートフォン）の画面

蒲郡市星越海岸におけるコアマモの分布とブルーカーボン

漁場環境研究部 漁場改善グループ

海の中には「アマモ」や「コアマモ」といった花を咲かせてタネを作る植物がたくさん生えている場所があります。こうした場所は「アマモ場」と呼ばれています。アマモ場は、魚介類の産卵や幼稚仔の摂餌、成長の場として重要な役割を果たしています。この他にも、アマモ場は海水の浄化機能や、環境学習、人が海とふれあう場所にもなります。最近では、空気中の二酸化炭素を吸収して貯める「ブルーカーボン」の要としても注目されています。

しかし、アマモ場は、潮が引いたときに海水につかたり出たりする場所（潮間帯）からいつも海水につかっている場所（潮下帯）に生えているため、陸上植物と比べて生育等に関する情報が不足しています。そこで、当グループではドローンを使って、アマモ場の面積の経年変化を調査しました。

調査は、海況や天候等の条件がそろった令和5年6月6日と令和7年5月29日に、蒲郡市三谷町にある「星越海岸」で行いました。ドローンを高度100メートルで飛行させ、海岸の上をジグザグに移動しながら動画を撮影しました。

その動画から1枚の大きな写真を作成し、さらに、植生が重なっている場所等、動画だけでは判別が難しい部分については、実際に現地で分布状況を確認し、コアマモの面積を求めました。

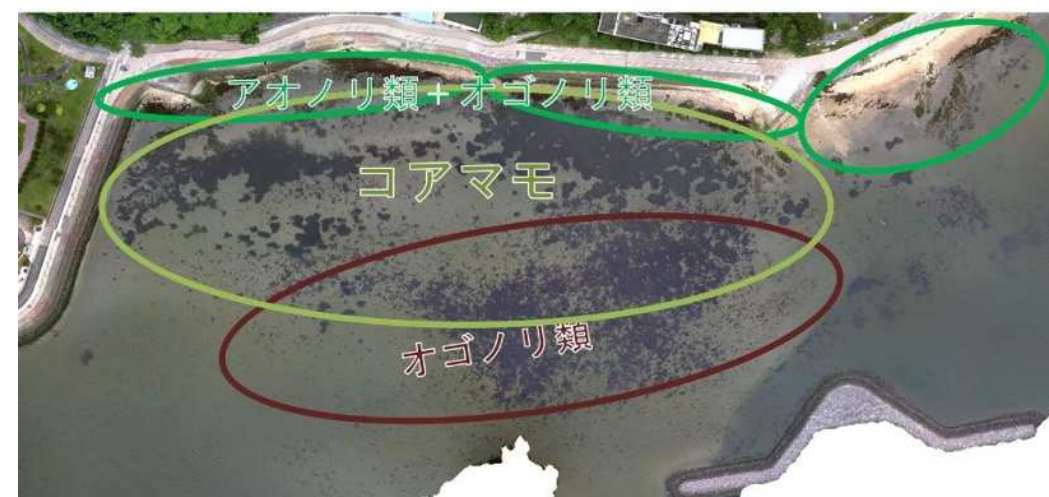


図3 星越海岸におけるドローン空撮写真（上：令和5年，下：令和7年）

その結果、令和5年には0.36ヘクタールだったコアマモが、令和7年には0.95ヘクタールまで広がり、2年間で約2.6倍に増えていました。

さらに、コアマモが吸収・貯めた二酸化炭素の量を計算すると、令和7年には年間で約5.6トンになりました。これは、直径20cmのスギの木640本が1年間に吸収する二酸化炭素の量に相当します。

これからも、当グループでは、ドローンを使ったコアマモの経年変化を調査していきます。